

盲目の老牧師と元終身刑の中年女性の
出会いに隠されたヒューマンドラマ

「ヤコブへの手紙」

評者・前島 常郎

●ストーリー

1970年代のフィンランドのとある田舎町、終身刑で刑務所にいるレイラ（カーリナ・ハザード）は、恩赦で出所する。受け入れ先になろうと申し出たのは、盲目の老牧師ヤコブ（ヘイッキ・ノウシアイネン）である。

レイラは、牧師の助けをするなど気が進まないのだが、だからといって他に行く当てもない。なぜ彼女が刑務所にいたのかは、この時点では分からない。見ず知らずの土地に、トランク一つで行き着いたレイラが見たのは、廃屋に近いと言ってもよい牧師館と、そこに住む盲目の老牧師だった。

ヤコブ牧師のもとに毎日届けられる手紙を読み、言われるままに



2009年フィンランド映画
アカデミー賞・外国語映画賞フィンランド代表作品
監督 クラウス・ハロ
出演 カーリナ・ハザード、ヘイッキ・ノウシアイネン
75分
販売元 エプコット



物語が、その後どう展開するのか、全く先が読めないが、日々欠かさず届いていた手紙がパタリと途絶え、ヤコブ牧師が気落ちしてしまふあたりから、物語が動き出す。

●見てみる

フィンランドの片田舎の風景がのどかである。森の中を三輪

自転車でやってくる郵便配達人、牧師とレイラが手紙を読む裏庭、教会までの道のり、どこもみどりに囲まれ美しい。音楽もあまり入らず、静かに仕上げた作品は、見ていて心が落ち着くような、素敵な景色に満ちている。

牧師の生活は質素そのもの。牧師館も、雨が降ると、ひどい雨漏りが始まり、そこらじゅうでバケツの出番である。何度か食事のシーンがあるが、ひとつのパンを少しずつスライスして食べるだけ。牧師は紅茶、レイラはコーヒー。それ以外は何もなし。

リラックスした様子も、楽しい様子もない食事風景だが、何度か出るこの場面でレイラの牧師への信頼が増す様子が見取れる。初めて来た日には勧められた席につ

かず、牧師と距離を置いていたが、後には牧師にお茶をいれるまでになるのだ。

牧師との生活に慣れてきた頃、高齢ゆえの妄想なのか、牧師がおりもしない結婚式に正装をして教会へ出かけてしまう。レイラは愛想を尽かして、牧師館を出ることを決めるのだが、逃げ出すことを決めたまではないが、行くところもない。呼んだタクシーに行き先を告げることもできないレイラは、結局、そこに留まる。このあたりから物語はクライマックスに向かう。静かに、激しく、レイラの過去やその悩みが明かされる。

レイラの罪状は何か、なぜ休みももらわずがむしゃらに刑務所で働いたのか、どうして牧師の手伝いをするようになったのか、なぜどこにも行く当てがないのか……。これらの謎は最後に解けるが、その悲しい過去には心が痛む。

●最後に

75分見終わった後に、「牧師の仕事とは、そもそも何なのか」「犯罪者、出所者の心理とはどういうものか」「赦すとは、赦されるとは」をなど考えさせられる。ヤコブ牧師とレイラ役のふたりは、まさしく追真の演技であった。